

サポートセンター 悠愛

企業名：社会福祉法人小国町社会福祉協議会
サポートセンター悠愛
所在地：熊本県阿蘇郡小国町宮原1530番地2
事業者：椋野 正信
設立：1990年
サイト：<http://www.oguninoyume.jp/>

小国の未来を、障がい者が明るくする。

伴走支援デザイナー：吉本清隆デザイン事務所・吉本清隆



アイデンティティ/事業を突き動かす内発的動機

椋野氏が福祉の世界に入ったきっかけは、たまたま福祉施設の職員募集を見たことでした。入職後、施設の民営化を推進し、就労継続支援A型・B型の事業所の立ち上げに尽力しました。事業を行う中で、人口減少・高齢化によって地元で有名な豆腐屋が廃業するなど地場産業が衰退している現状を知ります。この状況に危機感を持った椋野氏は廃業する豆腐屋さんを雇用し、設備を整えて就労を望む障がいのある方と「大豆工房 小国のゆめ」で豆腐づくりを始めました。豆腐の原料は耕作放棄地を活用し、熊本県産大豆「すずかれん」や幻の品種「おぐに黒大豆」を育て調達しています。現在は大豆以外にも野菜や米の栽培、鶏卵事業、それらを使った豆腐や納豆、味噌やシフォンケーキなどさまざまな商品を展開しています。



まちの未来を明るくする「小国のゆめ」

ビジョン

障がいのある方が働く場所を作りたい。働く場所を作るといことは、同時に居場所を作るといこと。椋野氏は常にこのことを意識し、活動しています。知的障がいのある方を中心に、難病の方など、社会生活に制限がある方のサポートを行いながら、「大豆工房 小国のゆめ」で働く方が「就労」を通して地場産業を支え、小国の魅力を発信していくことがビジョンです。

強みや特徴

地場産業の衰退や耕作放棄地の問題に対して、就労を望む障がいのある方を働き手とし、地域活性化に取り組んでいます。利用者の方々が働きやすい環境を整備するため、グループホームの立ち上げを行いました。2009年より小国郷農福連携と六次産業化プロジェクトがスタートし、耕作放棄地を活用し、小国町特産の大豆製品をつくり、地域住民や観光客に届けています。



豆腐作りの現場

経営課題

質の良い国産大豆を栽培し、豆腐屋仕込みの商品を作るようになり、実際に販売を開始する際、従来の障がい者福祉サービスの枠組みでは事業の限界を感じ、自社商品群の統一感が重要なことに気づきました。

お世話になっていた地域おこし協力隊の方から、デザイナーによる伴走と商品のブランド化が課題の解決につながるのではないかというアドバイスをもらい、吉本清隆デザイン事務所の吉本氏を紹介してもらいました。

自社製品群の統一感などデザインの課題の他にも、国産大豆を使用して豆腐を作ることで商品の価格が上がり、販売ターゲットである地域住民の方々が購入してくれなくなるのでは？という懸念もありました。持続可能なビジネスにするために、吉本氏とセッションしながら、解決の糸口を探っていきました。

デザイン経営での解決策

さまざまな商品に関連づけ、1つのブランドという統一した見せ方を行った「小国のゆめ」シリーズでは、新商品を発売する度に同じトーン&マナーで統一感あるデザインのロゴマーク・ポスター・チラシなどを制作しています。デザインのモチーフは、小国の大地から作られた大豆です。ロゴマークの上部は小国町の涌蓋山、下部は大豆を表現しています。また、この世界観の延長上に、農福連携レストラン「天空の豆畑」や「おぐにん卵」などの店舗や新商品を位置付けするために、デザインの力を活用し、商品や事業を全てつなげることを意識しました。デザインで付加価値を高めつつも、コスト面にも向き合いました。ラベルなどを作る際には、吉本氏からコストパフォーマンスの高い印刷会社を紹介してもらい、クオリティを担保しながら、運用が可能な体制を構築することができた点も、デザイナーによる伴走の成果です。

アウトプット



統一感ある小国のゆめシリーズ



新たな展開を生むスイーツや味噌など

これから

棕野氏は「後にも先にも障がいのある方々が小国で豊かに暮らせること。その上で、耕作放棄地を活用していきたい。」と語ります。例えば、1ターナー者をターゲットにし、新規就農者をサポートするためには、都市住民と小国を結びつける仕組みが必要となります。また、生産者が増えてくれば栽培した野菜を多くの方に届ける場所も重要となってきます。販売拠点の指定管理者として、これからも障がいのある方々と共に小国の地場産業の新たな可能性を模索していきます。